㉔ 其柳米寿賀摺

なけは啼空となりたり時鳥　公成
人のあく雨にきけんの水鶏かな　有節
通し鴨老た鳥にもなかりけり　九起
葉さくらや立添ふ人のわひ姿　文海
朝の間に池を廻るや梅もらひ　桃五
わさと来る人は稀なり若楓　五律
野に通ふ手拭しろし春の風　雀石
つけてある丸太つなくや春の水　倚柱
日は空に声やゝ遠し閑古鳥　赤甫
はさまりし柳か愛し屋根の石　黙池
麦秋や早うはあれと昼はたこ　淡節
年ことに見るや小松の曳残り　梅通
佇は黄鳥なくやきしのまつ　昇左
蛤や海見ぬ里も行わたる　潮水
笠縫か背戸の灯に来て啼水鶏　素屋
草の戸の古ひも見えすうめ柳　春右
霞む中歩行や船にのる心　鶴巣
あたらしき方か次郎の幟かな　九峰
是といふ高い木もなし霞む里　梅裡
佇むや柳見て居るひとりより　一清
雲踏てのほる峠やほとゝきす　三鳴
黄鳥や手せまき宿もたのもしき　李曠
散くちの□ら〳〵明て花さかり　而后
垣外の梅を小庭のなかめかな　完伍
おほろ夜やなてられさうな山斗　春芙
暑き夜や川の中洲に火のみゆる　蓬宇
立春の何より早し人のうへ　嵐牛
よき人の杯もらふ子の日哉　杜水
楪や日あしは去年のまゝなから　□□□
□□□□□□□□□□□□□□□□　□□□
花に鳥仮そめならぬちきりかな　立宇
黄鳥の声にはるゝや蒲の雨　旭齋
封切て初日をうける扇かな　可候
春雨や窓たちしたる筆つかれ　喜年
夕空をふつくり冠る柳かな　月杵
暁や近う見えたる春の山　一澄

いつ見ても古き住居やむら木槿　たよめ
里の火に向てならふや夕蛙　清民
垣こしの話受けり春の月　壮山
なけはこそ是も友なり閑古鳥　白亥
水音や心のひまをかんことり　一止
出代の宗旨もあひし笑顔哉　江三
歩行よき日中の雨や行々子　草居
横に寐る工夫はないか浮かはつ　御風
啼処道よりひくし閑古鳥　悠平
元日やはなれて居るはしら際　市猿
気ほときに経者ものそく牡丹哉　驚眠
香はしりて道のつきけり岨の梅　為山
朝風呂にほんのり屠蘇の匂ひ哉　卓郎
ゆた〳〵と鶴舞つれて初かすみ　不染
張出して梅にさはらす中二階　五休
遠山を今こしさうや郭公　明水
年々や島はひらけて麦の秋　潮堂
打かへす波のあとよりはつ霞　伴夢
三つの朝人にひとつの心かな　可尊
梅の下掃くも年経ぬかゝみ腰　太年
初日影海山遠くなりにけり　菊雄
朝けしきいけるはかりの飾海老　等栽
冬越しや夕黄鳥のもらひ啼　見外
雪掃て板ならへけり梅の中　氷壷
蓬莱に吹はしめるや家の風　春湖
正月やなくてかなはぬ菜大根　きを
むつましやひと間はとその飾りつけ　苣麿
明やすき夜は寐勝手もなかり鳧　四端
黄鳥やせまい庭とはおもはれす　然々
ういてある畑の土やうめの花　芦城
吉方かと問るゝ道や薄草履　貫手
朝風呂や柳くゝりて入る処　野井
花の春人も若木のこゝろ哉　新甫
寒いほと梅か香たつや日の出前　露心
ころ柿の歯にしむ朝や梅の花　思楽
若水やわけて吹井の汲こゝろ　五雀
わたぬきや汐さし来ねは船も出す　竹東
雪の野や若菜をけさの初みとり　草波